

住をめぐる旅 その1

家作りは本能か？

「子どものころにはまだ東京の郊外でもあちこちに空き地がのこされていた。空き地の一角に資材置き場があって、天井裏が秘密基地だった」と、筆者は語る。少年少女時代をふりかえり、「そういえば」と仲間うちの不思議な団結心を高まらせたあの場所、あのとぎを思い出す読者もいらつしやることだろう。秘密基地があった空き地はすでになく、基地メンパーもとうに解散して、それぞれの住まいや家庭を築いているかもしれない。人間が住まいを求める情動は、人間存在の本質にかかわるものなのだろうか。「住」をめぐって、旅立とう。

旅立ち

ある種の動物や昆虫は誰におそわるでもなく巣をつくる。人間もまた心の奥底にそのような情動をかかえているのではないか？この自明にみえた問いかけが、というよりも、学問を前提するテーマであり期待といってもよいが、いつしか私の心にさざ波をたてはじめた。地球上にはまだ身近な人間同士が協力して家屋を建てている民族がいる。そうした確信をよりどころに住まいの調査を続けてきたけれど、住宅だけが世界市場から取り残されているはずもない。それがどんなに伝統的なよそおいに彩られていたとしても、住むという行為自体が多かれ少なかれ国家の管理する住宅産業のしくみに巻き込まれているだけなのかもしれない。もし家作りが自動車のような商品でかわらないのだったら、もし人間の存在にとって本質的に重要なものではなくなっているのだとしたら、人の住まいを研究することの帰着点はいったいどこに求めたらよいのだろうか？



トンプソン・インディアンの竪穴住居。大地にいだかれて眠ることが人間の住まいの原型だった (Teit, James A. "The Thompson Indians of British Columbia", 1900)

間社会の生みだしてきた奇妙な(一)造形の数々がモノクロの写真で紹介されていた。西欧建築の伝統以外にも建築があるという、いまでは至極当然な事実にはじめて目を開かせた展示だった。機能性や合理性を旗頭に近代主義建築がまだ世界を席卷していた時代である。

この展示を風土的とか自然発生的とかまとめる以前に、人間も不思議な動物のひとつであることに気づかされた。ゾウやキリンを前にして、まずその造化の妙、創造の神秘にうたれる感覚に似ている。ゾウは自分の鼻がながい理由を訝(いぶ)かたりはしないだろう。鼻の短いゾウはゾウとよべないだけのことだ。



無意味に？デフォルメされた巨大屋根建築。ベトナム中部高地の共同家屋

楽園の喪失

「人間が自分の家を建てることのなかには、鳥がその巣をつくるのとおなじような適合性が見られる」。そう書きつけるソローはマサチューセッツ州のウォルデン湖のほとりにみずからの手で丸太小屋を建設する(『ウォルデン』あるいは森の生活 一八五四年)。「建設の喜びを私たちは永久に大工のもとに手放してしまうのであろうか？」と家作りの理由を説いていたソローも、苦勞してはじめて森の生活を一年あまりで切りあげてしまう。本の出版はその七年後だ。



いまでも続く地下生活の謎。中国黄土高原の窯洞(ヤオトン)住居

まさに、「かりのやどり、たが為にか心をなやまし、なにによりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかか無常をあらそふさま、いはばあさがほの露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといえどもあさ日にかれぬ。或は花しほみて露なおさえず。さえずといえども夕をまつ事なし」(鴨長明『方丈記』二二二?)というありさま。あるいはまた、こんな文言をのこした先人もいた。

「その土地から得られる材料で、できるだけ早く、飾りもそっけもなく、むき出しに、自然が生きている人間が家なしでいることを許さないから、しかたなしにその工作を始めなければならぬのである。(略)彼らこそ大きな野の上に孤立して極度の単純生活を堂々と営んでいるんだと思うと、またたたらなくうらやましく感じられてくる。」(今和次郎『日本の民家』一九二三年)

家や家族について書かれたおびただしい本の列をみれば、住まいがいまもむかしも大きな問題として個人の前に立ちはだかつていることを知る。「こんな家に住みたい」「こんな家で死にたい」「逆

原点へ

一九六四年にニューヨーク近代美術館でおこなわれたひとつの展覧会が当時の建築界に波紋を投ずることになった。展示のタイトルは「建築家なしの建築」という。企画したのは『みつともない人体』などの著者として知られるバーナード・ルドフスキー。まるで動物の巣作りさながらに人間社会の生みだしてきた奇妙な(一)造形の数々がモノクロの写真で紹介されていた。西欧建築の伝統以外にも建築があるという、いまでは至極当然な事実にはじめて目を開かせた展示だった。機能性や合理性を旗頭に近代主義建築がまだ世界を席卷していた時代である。

この展示を風土的とか自然発生的とかまとめる以前に、人間も不思議な動物のひとつであることに気づかされた。ゾウやキリンを前にして、まずその造化の妙、創造の神秘にうたれる感覚に似ている。ゾウは自分の鼻がながい理由を訝(いぶ)かたりはしないだろう。鼻の短いゾウはゾウとよべないだけのことだ。

現代人の多くは住宅を商品として購入する。その建っている土地や規模や機能に多少の差異はあれども、商品は消費することで、はじめて商品たりうる。つまり、そこに住むという人間の営みはこの商品の価値を減じさせ、台無しにしてゆく。なにかおかしきはないだろうか？どんなにキレイな宣伝文句をならべても、この住宅という商品にとっては、おまえの人生などないほうがよい。そう宣告されているようなものではないか！

佐藤 浩司 民博民族社会研究部



川のほとりか、すくなくとも水道栓のちかくに、所有権のおよばぬ手頃な空き地をみつけて、つかのまの居住地をさだめる。つかのまが一日であっても、一生のことであってもたいしたちはない。そこに四本の木の枝を突き立て、枝の先を横木でむすびあわせ、こうしてできた骨組みのうえに段ボールをのせるだけだ。風よけといっても風がよけられるわけなし、たとえ太陽の直射はふせげたにしても、毎日のおそろ熱帯のスコールのまえに、紙の屋根はひとたまりもない。けれども風よけは、都市という大自然のなかで、彼らがひとつ屋根の下に身をよせあい、生きてこの世にあることの証明だから、風よけのない彼らじんとは存在しないから、力強く、たくましく建ちつづけるのだ。(佐藤浩司「夢をつむぐ…都市の採集狩猟民」布野修司(編)『見知らぬ町の見知らぬ住まい』彰国社 1991年)